

平成12年 3月15日

発行 青梅市文化財保護指導員連絡協議会

青梅市郷土資料室

(青梅市駒木町 1-684 TEL0428-23-6859)

い か け 屋

「いかけ屋」の名を聞かなくなって久しい。いまでは、いかけ屋（鑄掛屋）といっても何をするのか知らない人が多い。「いかけ屋」は、壊れた鍋釜を修理する人のことである。終戦後しばらくまで、自転車に道具を積んでまわってくれた。空焚きして底が抜けてしまった釜や、すり減って穴の開いた鉄瓶などを修理してもらった記憶がある。少し前までの日本は、物を1回限りで使い捨てにすることなど決してなかった。衣類も、道具も、糞尿まで見事なまでにリサイクルされていた。特に百万都市江戸は、世界的にも稀な循環型都市であった。いかけ屋もその一環で、「しろめ」と呼ばれる接合剤を溶かして鍋釜の穴を埋め、再び使用されたのである。

勝沼の田中弘助氏（昭和6年生まれ）は、昭和34年頃まで、いかけ屋をされていた。いかけ屋は、曾祖父庄次郎氏（弘化4年生まれ）の代からで、「いかけ屋庄さん」と呼ばれていた。父の栄蔵氏（明治27年生まれ）もいかけ屋で、「銅栄」の屋号のもと、板金業も併業していた。

江戸のいかけ屋は、七尺五寸（2.25m）の長い天秤棒は、六尺（1.80m）太さ4.5cmであった。これは火の用心のため軒下七尺五寸以内の火の使用が禁じられていたためである。つまり、天秤棒で長さをはかり、軒下から七尺五寸以上離れた場所で火を起し、商売していたのである。田中氏は、いかけ道具をほぼ完全な形で保存しておられた。ちなみに田中氏の天秤棒は、六尺（1.80m）太さ4.5cmであった。

この天秤棒の両脇にふいご箱と道具を掛け、「鍋—釜—、いかけえー」と呼び声をあげながら街をまわって歩き、声が掛かると荷を下ろして商売をしたのである。

まず、壊れた鍋を叩いて穴をよく確かめ、砂型（砂にふのりを入れて固めた物）で穴の型を取り、接合剤を入れる部分を決める。（内側と外側の両方から）次に砂型に湯口（接合剤を流し込む通路）を作り、鍋の底に砂型を粘土で貼り付ける。それが、出来上がると、ふいごで火を起し、るつぼの中で接合剤を溶かし、間髪を入れずに接合剤を流し込んで穴を塞ぐ。この接合剤の溶かし加減が難しい。最後に砂型をはずし、余分な接合剤を取り除き、接着部分を磨いていかけの出来上がりである。工程の詳細は、もっと複雑だが、大略をのべた。

田中氏は、砂方を固定するための練り土取り、砂型作りの砂取り、松やに（もれを防ぐのに使う）取りまでしたそうである。おもしろいことに、接合剤として江戸時代の寛永通宝や文久銭が使われていた。氏は、布袋に寛永通宝を沢山入れておられた。寛永通宝は、銅と錫の合金で

できているで、接合剤に最適なのだとか。その他に真鍮（銅と亜鉛）、半田（錫と鉛）などが接合剤として使われる。終戦後は、何もかも不足していたので、いかけ屋も、夜なべをする程忙しかったそうである。しかし、高度経済成長と反映して日本の良き風習の火が消えていった。

（文責 小川）

- ・ 文化財ニュース第 148 号「武蔵御岳神社の奉納俳句」の表記の一部に不適切な箇所がありましたので、訂正してお詫びいたします

（誤） 夢の又 夢見て二日 坊泊まり	→	（正） 夢の又夢見て二日坊泊まり
悪がらす 初鴉とて 詠まれけり	→	悪がらす初鴉とて詠まれけり